

ウミウとカワウの黒い関係について

海老原美夫（浦和市）

水辺に行くと、気になるやつがいる。真っ黒で大きいやつ。川にいればカワウ、海にいればウミウと、普通は安易に片づけているのだが、うっかり本気で気にしてしまうと混乱が始まる。今回はこの黒い関係にせまってみた。

■識別ポイントは

要するに、ウミウとカワウの識別ポイントはどこなのだろう。少し大きいとか小さいとかいうが、この区別では分かりにくい。成鳥の背が緑色光沢があるか、褐色が強いかな。これは大きな手がかりだが、若鳥では区別はつかない。飛んでいる時に見える翼の位置というのも、観察位置や飛行状況によってなかなか難しい。決め手にはならない。

「私にも分かる」手がかりを求めて、『フィールドガイド日本の野鳥（略称・FG）』、『日本鳥類大図鑑（通称・清棲図鑑）』、神奈川支部報『はばたき』1992年3月号に上野動物園飼育課・福田道雄氏が書いた「カワウとウミウの識別」、福田氏が日本鳥類標識協会の会合で発表した内容のレジュメ、それらを紹介解説してくれた本部政策調査部長・園部浩一郎氏の私信などを読んでみた。

■黄色い裸出部が問題だ

後頭部の丸みがどうのこうのというのも私には分かりにくいので、パス。どんどんパスしていったら、最後に残ったのが、顔の黄色い裸出部が、その後ろの白い羽毛部と、くちばし付近で接する線の形。私は個人的にそこに行き着いた。ほか分かりにくいんだもの、仕方がないではないか。私はその線にしがみつくだ。

図を見ていただこう。FGでは、①の線がカワウ、②の線がウミウの様読み取れる。はたしてそうだろうか。

上野動物園に現れたウミウの写真、山階鳥類研究所の両者の標本の写真、たくさんのカワウの写真、自分で写したカワウ（と思われ

るやつ）と、ウミウ（と思われるやつ）のドアップビデオ映像などに目を通す。

園部氏の私信では、図の①②のように直線的な線はカワウ。ウミウは③のように曲線を描き、先端が尖って食い込んでいるという。私は、また川に出かけてカワウの顔を写し、海に出かけてウミウの顔を写し、ひたすらそこだけを見つけて、ついに納得した。②の線がかなり鋭い角度を描いているカワウもいるが、ウミウのような曲線的な食い込みはない。①②がカワウ、③がウミウなのだ。

FGのイラストとはちょっと違う結論になってしまうというのも、いかにも黒いやつらのやりそうなことだ。今後新たな知見が得られるまでは、私はここに識別ポイントを置く事にするが、顔の線が見えるほど近くなかったらどうするか。ま、その時は、川にいればカワウ、海にいればウミウと言ってしまう。それでいいのだ。

■埼玉にウミウはいたか

昭和53年（1978年）3月に埼玉県教育委員会が発行した『埼玉県動物誌』によれば、「北足立郡野村字代山（現在の浦和市代山）に生息している記録がある」として、根拠文献として「黒田長礼1925/日本産ウミウについて/鳥 No.20」があげられていて、これが県内の唯一の記録なのだ。

ところが、この黒田氏の論文を読むと、ここで書いてある「ウミウ」というのは、実は「カワウ」のことらしい。「ウミウ（一名カハツ）学名*Phalacrocorax carbo*」と書いてあるが、旧名カハツというのはカワウのことを言い、学名も現在のカワウのことだ。15ペ

